

## 全社協版『あなたのまちでやさしさをひろげるために』の考え方

日赤が作成した『新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう』は、「病気」―「不安」―「差別」という関係を構造的に認識し、その関連における「負のスパイラル」を断ち切るというメッセージは、とても重要な視点であり、大変参考になります。

そのことを基本にした上で、  
全社協としては、福祉教育の観点から、この「3つの顔」を次のように転換していきたいと考えました。

- ① 「病気」―「不安」―「差別」という、マイナスの「3つの顔」を、これからプラスの顔に変えていく。今の課題を、ストレングス（つよみ）に変えていくという発想です。それは「健康」―「安心」―「共生」という新しい「3つの顔」です。

※健康とは、WHO憲章「健康とはただ疾病や傷害がないだけでなく、肉体的、精神的ならびに社会的に完全に快適な状態であること」

- ② そのときに「負のスパイラル」も、「やさしさの循環」にしていく必要があります。

「健康」 → 「安心」    思いやる    自分のことだけではなく、他者のことを思いやること。

「安心」 → 「共生」    つながる    閉じこもってしまうのではなく、人とつながっていかうとする。

「共生」 → 「健康」    支えあう    自分にできること、相手に助けをもらうこと。お互いに支えあうことで、みんなの健康を創り出します。

- ③ この3つの力、「思いやる力」、「つながる力」、「支えあう力」を育むことが、コロナ禍で、「不安」を軽減し「嫌悪、偏見、差別」を生まないことにつながります。また、この3つの力を育むことが、「地域共生社会」の実現にむけた意識を形成していきます。

- ④ そのなかでは、福祉教育として、個人だけではなく社会に目を向け、コロナ禍で生じている偏見や差別について、より深める必要があります。そこで感染症の事柄から、「ハンセン病問題」を取り上げています。

- ⑤ 全社協版の福祉教育では、

(1) 「健康」、「安心」、「共生」という顔に変えていくこと。

(2) そのために「思いやる」、「つながる」、「支えあう」という3つの力を育むこと。

(3) 3つの力によって、3つの顔が創り出され、それが「やさしさの循環」としてひろがる地域社会を意図しています。

- ⑥ このプログラムの対象は、中学生をイメージしています。小学生、あるいは大人用には発達段階などを意識して、工夫してください。

- ⑦ コロナ禍で福祉教育を実施することは、とても条件が難しいです。そこで「50分」の場合、「100分」の場合など複数の学習指導案（プログラム）を示しました。また全体をひとつの単元（カリキュラム）として、単元計画も示しています。ただし、これらはあくまでも例示です。
- ⑧ 実践にあたっては、それぞれの地域、学校・子どものニーズや状況を踏まえて、地域の関係者の話を加えるなど、リアリティを大切にした展開が大切です。